

太平洋戦争の公的記憶：豪戦争記念館

鎌田真弓

1. はじめに

オーストラリアでは、第一次世界大戦の集団的記憶が国家のアイデンティティの創出に大きな役割を果たしてきた。中でもガリポリ（Gallipoli）上陸作戦¹は今日にまで語り継がれており、アンザック（ANZAC）精神は崇拝の対象となってオーストラリアの世俗宗教であると歴史学者イングリスは指摘する（Inglis 2001: 458-464）。本稿で論じる豪戦争記念館（The Australian War Memorial）も、第一次大戦で犠牲となったオーストラリア兵を追悼するために創設されたもので、アンザック精神を記憶する場として機能してきた。

現在では、第一次大戦の帰還兵で生存する人は皆無に近い。2002年、ガリポリ上陸作戦の体験者の最後の生存者であったキャンベル（Alec Cambell）氏の死は、一時代の終わりを告げる出来事としてオーストラリア国内で大きく報道された。90年近い年月を経ても、第一次大戦への関心が薄れるばかりか、今日のオーストラリアではますます高まりをみせている。

オーストラリアでは、ガリポリ上陸作戦が行われた4月25日はアンザック・デイ²と称され、最も重要な祝日の1つである。祝祭日の制定は州政府の管轄であるが、アンザック・デイはオーストラリア・デイ（1月26日：シドニーへの入植が始まった日）と並び、全国共通の祝日である。アンザック・デイには全国各地でRSL（退役軍人連盟）³の主催で、明朝の礼拝や追悼式典と帰還兵や従軍体験者のパレードが行われる。首都キャンベラにある豪戦争記念館では、連邦総督、連邦首相、ニュージーランド大使、首都特別地域首席大臣、連邦上・下院議長、野党党首、陸・海・空軍総司令官などが追悼式典に出席して献花が行われる。アンザック・デイへの一般の参加者数は年々増加し、2006年のキャンベラの豪戦争記念館での明朝の礼拝には、27,000人という過去最大の数を記録した。ガリポリ上陸90周年にあたる2005年のアンザック・パレードでは、キャンベラのRSLが第一次大戦の帰還兵の子孫である子供たちから旗手を募集したところ、多数の応募があり、抽選せざるを得なくなるという関心の高さであった。ガリポリへの「巡礼」をするオーストラリア人も年間2万人にものぼり、ガリポリはオーストラリア



図1. 豪戦争記念館

正面は「追憶の堂（Hall of Memory）」。中庭（Commemorative Courtyard）をはさんで両翼の1階部分が展示室で、左側が第一次大戦、右側が第二次大戦の展示室となっている。2階の回廊に「名誉の戦死者リスト（Roll of Honour）」があり、10万2000人の戦死者の名前が刻まれている。



図2. 豪戦争記念館から国会議事堂を望む

バリー・グリフィン湖をはさんで、豪戦争記念館、アンザック・ストリート、旧国会議事堂、現国会議事堂と一直線に並ぶ。

人の「聖地」とまでいわれている。豪戦争記念館が毎年企画しているアンザック・デイのガリポリへの旅も好評を博している。

同時に、第二次大戦、特に太平洋戦争への関心も高い。第二次大戦はアンザック軍として戦ったわけではないが、アンザック精神はオーストラリア人気質として語り継がれ、太平洋戦争に従軍した兵士の物語にも継承されてきた（鎌田 2004）。1970年代にはアンザック・デイのパレードの主役が第一次大戦から第二次大戦の帰還兵に交替し、今日では第二次大戦の従軍経験者も高齢化している。にもかかわらず、アンザック・デイへの参加者数は増加の一途を辿り、戦争体験のない多くの若者が参加しているのである。オーストラリア各地で催されるアンザック・パレードに、勲章を右胸に飾って祖父や曾祖父に手を引かれながら行進する子供の姿も不思議な光景ではない。

つまり、今日のオーストラリアでは、国家の戦争体験は戦争の非体験者によって語り継がれ、アンザック・デイのような様々な追悼式典やメディアを通じて、非体験者は戦争の疑似体験を繰り返しているのである。ショッピングセンターの中の大衆向けの本屋でも、Gallipoli と並んで、Kokoda、Darwin Bombing、Hellfire Pass、Singapore など、太平洋戦争に関するタイトルが目をはく。ガリポリが第一次大戦の象徴ならば、オーストラリア国家の戦争体験として語り継がれている太平洋戦争は、ココダ戦⁴と日本軍捕虜収容所での体験に代表される。

今日、日本でも、首相の靖国神社参拝問題をめぐる論議にみられるように、太平洋戦争の記憶の再構築が行われている。しかし、あの激戦地であった東部ニューギニアを統治していたのがオーストラリアだったことや、日本軍がオーストラリア北部を爆撃し、また、特殊潜航艇がシドニー湾に停泊中の豪海軍宿泊船を攻撃し、死者を出したことを知る日本人は少ない。かつて日豪が交戦国であったことすら想起されないことが多い。

本稿では、オーストラリアの戦争の記憶の装置として中核的な役割を果たしてきた豪戦争記念館に焦点をあてて、オーストラリアで太平洋戦争がどのように語られ、何が記憶され、どのような集団的記憶が創り出されているのか考察したい。

2. 公的記憶の装置としての豪戦争記念館

キャンベラにある豪戦争記念館⁵は国立の戦争記念館で、エインズリー山の麓、バリー・グリフィン湖をはさんで国会議事堂の真正面に建つ。設置法である「豪戦争記念館法（the Australian War Memorial Act 1980）」では、「戦闘や戦闘に近い状況での軍務に従事した結果死亡

したオーストラリア人を追悼するために、国家的な記念行事を維持・発展させ、資料の展示や研究を行い、豪軍事史や記録資料や記念行事に関する情報を普及させること」がその機能として規定されている。つまり、追悼の場、博物館、調査機関としての3つの機能を備えている戦争記念館なのである。オーストラリアには、どの町にも第一次大戦の記念碑があり、各州にも戦争記念館があるが、このように博物館として充実した展示を備えているのはキャンベラの戦争記念館だけである。まさに「すでに忘れられたはずのことを思い出し、記録し、自分が経験したかのように『記憶』する人々を増やす啓蒙機関」（藤原 2001:38）として機能しているといえよう。年間100万人を超える来館者があり、そのうちの1割は学校行事の一環として訪れる生徒たちで、駐車場には常に大型バスが何台も駐車されている。

国立の戦争記念館の創設は第一次大戦中に構想された。その中心的役割を果たしたのが、従軍記者としてガリポリ上陸作戦や西部戦線を体験したビーン（C. E. W. Bean）⁶と陸軍大尉としてガリポリ上陸作戦を指揮したトレラー（John Treloar）⁷である。特に、従軍記者として豪軍とともに行動したビーンは、第一次大戦でオーストラリア国民が払った犠牲を目の当たりにして、「戦争を理解することによって追悼する（commemoration through knowledge of war）」ために常設の博物館の建設を訴えた。したがって、豪戦争記念館は当初から、追悼記念館と博物館は不可分なものとして構想されていたのである。

さらに、兵士として戦った一般市民の犠牲を記憶するために、構想時から「名誉の戦死者リスト（Roll of Honour）」の設置が含まれ、階級を記さず出身地毎に区分した碑を作るようになっていた。結局は、出身地毎の区分は作業が煩雑すぎるために不可能と判断され、階級を記さずに部隊毎にリストが作成されることになった。現在豪戦争記念館の回廊には10万2000人の戦死者の名前が刻まれている。つまり、兵士として戦った一般市民の犠牲を国民の物語として記録し、国民がその犠牲を忘れず、語り継ぐ場として建設されたのが豪戦争記念館である。

第一次大戦中は豪軍は英連邦軍の指揮下にあったが、多大な犠牲を払った豪軍としては、英連邦軍としてではなく豪独自の軍事史を記録すべきだとの認識から、豪戦史の編纂の任務がビーンに与えられた。さらに、こうした豪軍の記録や遺品・戦利品を、英国でも州政府でもなく、豪連邦政府が管理するために、1917年には豪戦史記録部（the Australian War Records Section）が創設されてトレラーが配属され、豪軍の戦闘記録や遺品の収集が行われた。戦史記録部に集められた収集品は、1923年から25年にメルボルンで、1925年から35年にはシドニーで展示されて好評を博した。こうした展示の成功を受けて、常設展示ができる戦争記念館を首都キャンベラに建設するよう、連邦議員へのトレラーの熱心な働きかけによって国立戦争記念館の設置が決定された。

しかし、豪戦争記念館の創設が決定した時期には、キャンベラも首都としての建設工事を始めたばかりで、国会議事堂や連邦政府機関の建設が急務とされていた。したがって、豪戦争記念館の建物の建設や資料の整理のための資金は潤沢ではなく、1929年のアンザック・デイに着工をしるす礎石が建立されたものの、建物が完成したのは第二次大戦中の1941年のことである。第一次大戦の戦史の記録と犠牲者の追悼のための記念・博物館であったが、第二次大戦の記録も収集することが決定された。「追憶の堂（Hall of Memory）」と「名誉の戦死者リスト」が完成したのは1959年のことである。1960年代から70年代にかけては、十分な資金もなく、収集品の痛みも激しく、展示室の増築や保管倉庫の建設が急務とされていた⁸。

豪戦争記念館に国民の関心が集まるようになったのは、ベトナム反戦運動が沈静化した1970

年代後半から 1980 年代のことである。豪戦争記念館の主任歴史学者であるスタンレー (P. Stanley) 博士によれば、1980 年代は、オーストラリアのナショナル・アイデンティティとしての豪軍事史への関心が高まった時代でもあったという。豪戦争記念館への来館者も、戦争を体験していない世代が多数派になり、そうした来館者の変化に対応した展示が作られていった。1984 年にはガリポリ戦の展示室が完成した。また、それまでは内務省や文化担当省など管轄省庁が確定していなかったが、1985 年以降は豪戦争記念館の管轄は退役軍人問題担当省 (Department of Veterans' Affairs) に確定した。

1990 年代に、オーストラリア社会で過去の戦争への関心が高まるとともに、豪戦争記念館の展示や機能も拡充されることになった。特に、来館者の展示への期待に配慮することが重要だと認識されるようになり、豪戦争記念館はますますその啓蒙的役割を強化していく。1990 年代半ばに展示室の大幅な見直しが決定され、資料室と展示室が現在の形を整えたのは 1999 年のことである。また、豪戦争記念館では、過去の戦争に関わる様々な追悼式典が行われるようになった。

前述したように、アンザック・デイにはオーストラリア各地で、追悼式典とパレードが行われるが、豪戦争記念館ではアンザック・デイの追悼式典とともに、第一次大戦停戦記念日 (Remembrance Day)、第二次大戦中の対独戦の終戦記念日、対日戦の終戦記念日など、国立の記念館として国家行事としての様々な追悼式典が行われる。かつては、アンザック・デイの追悼式典は「追憶の堂」正面の中庭 (Commemorative Courtyard) で行われていたが、参加者の増加により、建物正面の広場で特設会場ができるように整備された。また、キャンベラを訪れる各国政府の要人は、豪戦争記念館で献花を行うことが慣例となっている。さらに、豪戦争記念館前正面の国会議事堂方向へとまっすぐに延びるアンザック通りの両脇には、豪陸・海・空軍、従軍看護婦部隊、ベトナム戦争派遣軍、朝鮮戦争派遣軍など各種の部隊の記念碑が並んでいる。豪記念館横の芝生の庭にはガリポリから持ち帰ったロンパインの老樹が枝を繁らせているが、1999 年には「彫刻の庭園」が開設されて、小道沿いに各種部隊の記念プレートが埋め込まれ、太平洋戦争後の対日占領軍、サンダカン捕虜収容所の犠牲者の追悼碑などが点在して、豪戦争記念館一帯が、神社か寺院の境内のような配置である。

特に 1993 年、フランスから持ち帰った豪兵の遺骨を安置するために「追憶の堂」に「無名兵士の墓」が作られてからは、豪戦争記念館はクニのために身を捧げた人々を奉る神殿としての趣きが強くなっている。家族や戦友といった顔の見える故人を忘れまいとして「名誉の戦死

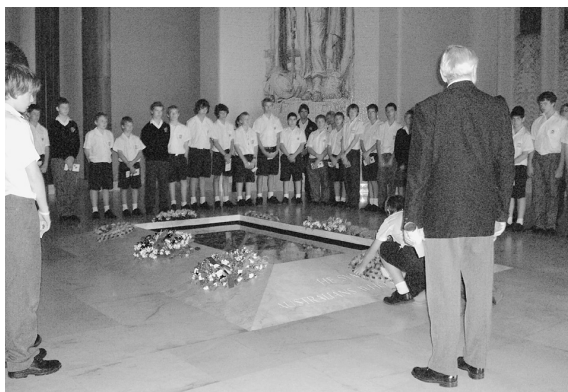


図 3. 無名兵士の墓

「追憶の堂」で「無名兵士の墓」に献花をする生徒たち。

者リスト」に刻まれた名前に赤いポピーを添えるのではなく、その総体としての墓の前で祈りを捧げるための巡礼が可能になったのである。1993年以降「名誉の戦死者リスト」に添えられる赤いポピーの数も急増している。今日では、キャンベラの豪戦争記念館が、オーストラリア人の「聖地 (sacred site)」としての地位を得ているといっても過言ではない。

「無名戦士の墓」に遺体が安置された時には、キーティング (Paul Keating) 首相は感情を込めてスピーチを行った。「彼は第一次大戦中の西部戦線で戦死した4万5000人のオーストラリア兵の1人であり・・・第二次大戦に従軍した32万4000人のオーストラリア人の1人であり・・・今世紀の戦争で亡くなった10万人のオーストラリア人の1人」なのである。「彼はそうしたすべての人々であり、また、私たちの1人」なのである。このキーティングのスピーチ¹⁰はアンザック精神を高らかに謳い、こうした犠牲によって「私たちは、勇気と献身と民主主義の信念と、オーストラリア人であることが何たるかを理解する」と続く。豪戦争記念館は物見遊山として訪れた来館者には襟を正させ、「追憶の堂」では声を出すことすら憚られる神聖な場となった。今日では、州政府の代表や外国政府の要人だけではなく、毎日何組もの生徒たちが「無名兵士の墓」で献花の儀式を行っている。そして、閉館時には毎日、「追憶の堂」の前で、ラッパによる 'Last Post' かバグパイプによる 'Lament'¹¹ が演奏され、厳粛な雰囲気の中で扉が閉められる。

こうして豪戦争記念館が追悼するのは、クニのために戦争で身を捧げたオーストラリア人なのである。戦争の悲惨さを伝えるものではあっても、戦争を否定するものではないし、戦争の惨禍に巻き込まれた市民の受難を悼むものでもない。

それでは、戦争での犠牲者を追悼するために、豪戦争記念館が展示を通じて「忘れてはいけないこと」として提供しているのは、どのような知識なのだろうか。あるいは、来館者はどのような疑似体験をし、何を記憶するのだろうか。特に、太平洋戦争はどのように語られているのだろうか。

3. 「国民の物語」としての戦争：包摂と排除のベクトル

上記の疑問に答える前に、なぜ、1990年代にオーストラリアでは、過去の戦争への関心が高まってきたかを、まず考えてみたい。

1970年代のオーストラリアでは、ベトナム反戦運動の影響を受けて、過去の戦争への関心は低く、戦争を美化するものであるとして、アンザック・デイの意義すらも問われていた。対外政策ではアジア・太平洋国家化を模索し、アジア系移民の受け入れによって国内社会のアジア化が進む中で、アンザック・デイのような英国中心的な歴史観に共感する人々が減少した時期でもあった。ウィットラム (G. Whitlam) 労働党政権下では、アンザック・デイの廃止すら議論されていたし、帰還兵の高齢化とともにアンザック・デイの意義も失われ、いずれはパレードも行われなくなるであろうと予測されていた。

ところが、上述したように、1990年代になってアンザック・デイへの参加者数は増加し続け、若者や子供たちの姿も多くみられるようになった。オーストラリアにおけるこうした過去の戦争への関心の高まりは、多文化社会化と先住民との和解というオーストラリア社会が直面した2つの大きな課題と無関係ではないと思う。ハンソン論争や喪章史観批判の登場と同じように、「国民の物語」(藤原、2001:143)としての戦争体験の再構築は、オーストラリア社会のア

アイデンティティの揺らぎへの漠とした不安に呼応しているといえる。

第二次大戦中のオーストラリアの人口は約700万人、現在の総人口は2000万人超で戦後の人口増の多くは移住者に依る。「新参の」移民は、国民神話であるガリポリやココダを共有することによって、オーストラリア人としてのアイデンティティを確立し得る。したがって、「国民」単位の経験である戦争 (*ibid*:151) は、新参者移民をオーストラリア社会に包摂するベクトルを持つ。

一方で、第一次・第二次大戦に従軍した曾祖父や祖父母などの近親者を持つということは、長くオーストラリアの地に住みクニを守った人々の子孫であるという点で、「正統な」オーストラリア人の証となる。つまり、オーストラリア社会の多文化化が進む中で、家族や親族の従軍という私的領域での戦争体験が「正統な」オーストラリア人と「新参者」移民との差異を際立たせ、「新参者」を周辺化する力を持つのである。

さらに、自己犠牲を強いてクニを守ったという戦争の物語は、オーストラリア国民とオーストラリア大陸との絆を証明する物語でもある。先住民族の権利回復要求と「白いオーストラリアの黒い歴史」認識は、過去40年ほどにわたって、大半のオーストラリア国民に植民者としての負い目とオーストラリア大陸での疎外感とを味わわせるものであった。ゲルダーとジャコブスは、先住民族が呈示した「聖地」の言説は、主流社会のオーストラリア人が自分たちの故郷 (*home*) だと確信していたものを、異質で不可解な場所へと変質させたと指摘する (*Gelder and Jacobs 1998*)。徴兵ではなく志願兵が中心であったオーストラリア国民の戦争の物語は、「オーストラリア」を守った国民としての存在の正統性を回復する説得力を持ち得る。オーストラリア人魂の象徴的な出来事が刻まれたガリポリやココダは、オーストラリア国民の「聖地」となり、戦死者の名前が刻まれた豪戦争記念館は国民の神殿へと変貌するのである。

オーストラリアにおける「国民の物語」としての戦争の記憶は、歴史を共有する単位としての国民を創り出してきた。その国民が多様化し、「正統な」オーストラリア人のアイデンティティが浸食される今日、クニを守った国民の物語はオーストラリア大陸での存在の正統性を与え、また、家族の従軍体験が主流社会の中の主流としての正統性を保証するという、包摂と排除の多面性を持った言説だといえる。

4. 太平洋戦争の「利便性」

それでは、こうした「国民の物語」の中に、太平洋戦争はどのように位置づけられるのであろうか。

第二次大戦中、豪兵は太平洋戦線のみならず、中東やギリシャ、あるいは空軍パイロットとして対独爆撃にも参加している。第二次大戦で命を落とした豪兵は約40,000人、うち太平洋戦線での死者は約27,000人（うち日本軍捕虜収容所での死亡は8,000人）で、太平洋戦争での犠牲はヨーロッパ戦線よりも大きい。けれども、局地的にみると、クレタ戦線では3,000人、対独戦に加わった空軍パイロットの戦死は4,000人を数える。また、ココダ戦よりも短期間のエル・アラメイン戦でも1,200人で、ココダ戦での豪側の戦死の625人を上回る。ブナ・ゴナも含む6ヶ月間の戦闘で2,000人、パプア全域でも2,200人、ニューギニアを含めれば8,000人という戦死者数は、犠牲者数としては格段に大きかったわけではない。しかし、中東やヨーロッパ戦線で戦った豪兵の物語は、太平洋戦争ほどの光彩がないのは、「太平洋戦争」が「国民の物

語」として「便利な」要素を含むからである。

第一に、2005年のVP Day（対日戦勝記念日）にハワード（John Howard）首相が演説したように、太平洋戦争は日本の脅威に対抗するための「正当な戦争（good and just war）」であった。侵略ではなく、また市民を巻き添えにした豪軍の戦闘も少なく、道義性が問われることのない戦争だったといえる。つまり、豪兵の自己犠牲は確かにクニを守るための行為であったと位置づけられる。現在のハワード政権下では、こうした「日本の脅威に戦った勇敢な豪兵」の物語が、「テロの脅威と戦いクニを守る豪兵」の物語へとすり替えられ、巧みに利用されていると、ネルソンは指摘する（Nelson 2003）。

「外部からの脅威」の物語の中では、特に、日本軍によるダーウィン空爆が日本の脅威の象徴的な意味を持つ。開戦後まもなく日本によるオーストラリアへの侵攻の可能性は否定されていたにもかかわらず、日本軍侵攻の脅威は史実以上に強調されてきたとスタンレーは指摘する（Stanley 2005）。また、豪兵の勇敢な闘いの象徴とされるココダ戦は、実際以上にその戦績が強調されている。史実と異なる大衆化した歴史（popular history）が創られ、政治家は国家の理想像を提示する手段として利用しているとも指摘されている（Nelson 2003）。そもそも、大半のオーストラリア人は、ポートモレスビー防衛戦を経験するまで、オーストラリア領としてのパプア・ニューギニアの存在すら認識していなかった（Nelson 2005b）。さらに1942年後半頃から展開された日本軍掃討作戦は、補給路を断たれ餓えと病気に苦しむ日本軍に対して、その必然性は低かったと言われる。

第二に、第二次大戦に海外派兵された豪軍は志願兵であり、アンザック神話はそのまま彼らに継承されてきた。戦間期を通じて「平等意識が強く、機知に富み、権威に対して媚びることもなく、勇敢で、決して仲間を裏切ることのない」豪兵像は定着し、第二次大戦に従軍した豪兵の行動規範ともなっていた。第二次大戦中の戦闘のみならず、捕虜収容所での受難に耐えた豪兵の体験にもアンザック精神が投射された集団的記憶が創り出され、オーストラリア国民の特性として語り継がれている。2001年にABC放送局が制作した'Changi'と題されたテレビシリーズには、チャンギ捕虜収容所での受難を逞しく生き抜く、まさにそうした豪兵が描かれている。2006年に公開されたKokodaと題する映画も、「勇気、忍耐、友情、献身（courage, endurance, mateship, self-sacrifice）」¹²という言葉で結ばれているという。

第三に、第二次大戦は女性の活躍が目立った戦争であった。フェミニズム運動最盛期の1980年代前半は、'Women Against Rape'などの女性団体がアンザック・デイは戦争を賛美するものであるとして批判を強め、アンザック・パレードで衝突した事件が頻発したが、現在ではそうした光景は見られない。それよりも、「銃後の守り」のみならず、前線で果敢に活躍し、あるいは命を落とした女性たちの体験に関心は集まっている。豪戦争記念館の展示も観ても明らかに女性の比重は高いし、展示内容を決定する時の退役軍人会との公聴会の折にも、女性代表との交渉が最も難しいという¹³。

第四に、太平洋戦争の物語には、オーストラリア軍によるアジア地域への貢献というストーリー展開も可能である。しかも、戦後オーストラリアに移住したアジア諸国からの移民も、日本軍の侵略の体験を共有できる人々が大半である。この展開を最大限に利用しようとしたのが、キーティング首相であった。キーティングは、豪軍がココダの戦闘で日本の侵略を止め、また、豪軍はアジアを守るための戦いに貢献したのだと言う。1992年のアンザック・デイにはココダを訪問し、豪兵の尊い血が流された大地に跪いて接吻したのである。また、2002年8月14日

の対日線戦勝記念日には、ココダ戦 60 周年を記念して、ハワード首相が退役軍人とともにイスラバを訪れ、「勇気、忍耐、友情、献身」と刻まれた石碑の除幕式を行っているし、2005 年 9 月のパプア・ニューギニアの独立記念日の式典に出席した際に、豪連邦総督¹⁴はヘリコプターでココダ山道の上空を訪問している。

第五に、未だ十分なストーリー展開は見られないが、先住民族の貢献も物語の 1 章として書き加えることも可能である。豪北部防衛に従事した豪先住民や、ニューギニア戦に豪兵として従軍し、あるいは豪軍を支援した現地人の物語は、必要とあらば「思い出し」て「語り継ぐ」ことができよう。今日キャンベラで行われるアンザック・デイでは、明朝の礼拝の後に先住民族の退役軍人による追悼式典が独自に行われている。1975 年には豪戦争記念館の回廊に刻まれた戦没者名に、豪軍に従軍して戦死したパプア・ニューギニア出身者の 150 名の名前が追加された¹⁵。また、2006 年のシドニーでのアンザック・デイには、豪軍に従軍したパプア・ニューギニア人が、伝統衣装をまとうてパレードに参加している。一方で、昨今の「ココダ」の記憶からは、ココダ山道はオーストラリアによるパプアの植民地統治の歴史にはしばしば登場し、また、東部ニューギニア戦で豪兵に協力した現地人は、強制的に駆出された人々であったという、パプアの植民地化の歴史の視点は完全に欠落しているとネルソンは指摘する (Nelson 2005b)。

5. 豪戦争記念館の展示に観る太平洋戦争

それでは、豪戦争記念館で太平洋戦争はどのように展示されているのだろうか。

豪戦争記念館の博物館セクションの入り口には、ガリポリ上陸作戦に使われたボートが展示され、廊下を進むとまずガリポリ戦の展示室に入る順路となっている。つまり、アンザック神話の象徴が来館者を迎え、オーストラリア人であれば期待通りに展示室へ誘われる。無数の体験から選別され、展示の中に切り取られた記憶は、訪れた人々の集団的体験を作り出す。豪戦争記念館の展示は史実を正確に伝えることを目的としており、来館者の様々な関心に応えるよう知識が提供されているが、オーストラリア人が持つ一般的なイメージに対して挑戦的な啓蒙活動をするものではない、とスタンレー博士は言う¹⁶。換言すれば、豪戦争記念館の展示は、社会で作り出された集団的記憶を強化する機能を持つといえる。

豪戦争博物館で展示の対象となっている戦争は、植民地期の戦争（義和団事変やボア戦争）、第一次大戦、第二次大戦、第二次大戦後の戦争・紛争（朝鮮戦争、ベトナム戦争、湾岸戦争、おび国連平和維持活動）である。1990 年代に入って、来館者の増加と戦争体験の有無などによる来館者の関心の変化に対応するため、展示の大幅な見直しが行われることになった。1995 年にまとめられた展示案では、評議員だったブレインニー (Geoffrey Blainey) 教授の長年の主張を取り入れて、植民地期の対先住民との紛争も展示対象に含まれていた (AWM 1995)。しかし、その後の政権交替に伴う評議員の交替もあり、豪先住民との紛争は豪戦争記念館の関知するものではない、との方針が決定された。

現在は 1 階部分の東西両翼の展示室は第一次大戦と第二次大戦に分けられ、奥には、ヴィクトリア勲章を含む幾多の勲章が飾られた「勇気の間 (Hall of Valour)」、航空機関連の展示室、シドニー湾で沈められた日本軍の特殊潜航艇や対独空襲にも参加したランカスター機、戦車などが展示されて映像と音を駆使したショーが行われているアンザック・ホールがある。第一次

大戦の展示はガリポリ展示室から始まるが、第二次大戦は、メンジーズ首相の開戦のアナウンスに始まり、中東・地中海地域での戦闘、太平洋戦争、対独戦などが年代順に並べられている。航空機の展示やアンザック・ホールの展示も第二次大戦期のものであるため、床面積では第二次大戦の展示の方が、第一次大戦よりも大きい。また、第二次大戦の展示は、中東・ヨーロッパ戦線も含まれるが、太平洋戦争の部分が圧倒的に大きい。

それでは、太平洋戦争の展示には、どのような特徴が見られるだろうか。

まず第一に、オーストラリア国民が一般的にもつ太平洋戦争のイメージや日本軍のステレオタイプを否定するものではない。来館者の平均の滞在時間は約1時間。館内の見学は第一次大戦の展示室から始めるのが一般的であるから、第二次世界大戦の展示に辿り着く時にはかなり疲れていて、第二次大戦の展示は足早に見て回る人が多い。ほとんどの来館者は1つ1つの展示の説明を読む時間はなく、目を引くもの、あるいは、見たいと思っているものを見る。したがって、多くの場合、展示は既存のイメージを再確認するものとなる。

ココダ戦は、ジャングルの雰囲気を出した大きな展示の中にあるスクリーンにアカデミー賞を受賞したダミアン・パラ（Damien Parer）の 'Kokoda Front Line' の1部が映写されている。捕虜収容所の展示ではチャンギ収容所の小屋の内部の大型模型があり、「サンダカン死の行進」の展示室には死亡した豪兵の顔写真が壁一面に貼られて、生存者の証言のテープが流れている。その展示室の前には、ボルネオのクチン日本軍捕虜収容所の開設記念の石碑が置かれている。ココダ戦と捕虜収容所は特別の展示スペースが確保されているといえる。おそらく、来館者が期待するよりも小さな展示で、1997年の展示案（AWM 1997）よりも縮小されているのがダーウィン空襲であろうが、スタンレー博士によれば軍事史上の（非）重要性に相当するスペースであるという¹⁷。

一般的には日本軍によるオーストラリア侵攻の脅威が信じられている中で、その侵攻の可能性を否定した解説はいくつか見られる。あるいは、カーティン（John Curtin）豪首相は、チャーチル英首相の反対を押し切って、豪本土防衛のために中東から豪軍を呼び戻したという言説も、二人の首相の電報でのやり取りを根拠として否定されている。また、太平洋戦争のターニン



図4. 太平洋戦争の展示入り口

正面のケースに日本陸軍の軍服と軍刀が展示され、その前には旭日旗を模した赤い光が床に投射されている。正面奥は、シンガポール陥落のセクションで、パーシバル中將が降伏文書に署名をしたフォード自動車工場のテーブルと旭日旗が展示されている。

グ・ポイントが珊瑚海海戦だと解説されて、ココダ戦ではない。ココダ戦はミルン湾上陸作戦と一緒に、日本軍のポートモレズビー攻略作戦の中に位置づけられている。さらに、東部ニューギニアでの日本軍掃討作戦は、日本の敗戦を早めた効果は無かったとも解説される。展示場の解説を1つ1つ丁寧に読んでいけば、豪戦争記念館の戦史部の歴史家の作業が見えてくるし、大衆化した歴史認識とは異なる解釈を発見することができよう。しかし、こうした解説を読み通す来館者は皆無に近い。

第二に、当然のことながら、展示での日本軍の存在感は大きい。太平洋戦争のセクションの入り口の中央には、陸軍の軍服と軍刀が展示ケースに入れられ、来館者を正面から迎える。日本軍の象徴である旭日旗や日章旗、軍服、軍刀は、かなり効果的に展示されていて、来館者の目を引く。こうした敵の姿は、第一次・第二次大戦の展示の中のドイツ軍やトルコ軍、イタリア軍には見られない。

かつてビーンは豪戦争記念館の展示の方針を示したことがある。そこでは、敵を敵視した展示ではなく豪兵と同等に扱うこと、したがって、「敵 (enemy)」という語句は解説には利用しないこととされた。現在も展示には「敵」という語句は使用されず「日本人 (Japanese)」であり「ドイツ人 (German)」である。また、1950年代にはビーンが示した方針に従って、日本刀と軍服は敵の降伏の象徴であるとして、展示から取り外されたことがある。しかし公衆の強い要望に応じて展示に戻されることになった¹⁸。「敵」の解説はしないとはいえ、日本刀や軍服、日章旗は、オーストラリア人が持つ残虐で狂信的な日本軍のイメージに直結する。

太平洋戦争の展示セクションの半ばぐらいに、ほとんどの来館者が足を止める展示がある。目隠しをされた豪兵を日本兵がまさに斬首しようとしている写真である。展示室の入り口の中央の独立したブースに入り、見学者の進行方向の正面に据えられている。その写真の両脇には、処刑されたシフリート軍曹の略歴や処刑にいたる経緯と、日本軍通訳だったユメノクニオの「すばらしい一撃 (an excellent stroke)」と題した日記の一部が印字されている。ただし、まさに一撃を加えようとする写真の日本兵が「ユメノクニオ」ではないことの説明はない。

第三に遺品の扱いである。ビーンが示したもう1つの方針は、遺品を分類して展示するのではなく、遺品に物語を語らせて興味深い展示をすることであった。敵方の遺品は「戦利品 (trophies)」と呼ばれてきたが、ビーンの時から「遺品 (relics)」が使用されてきた。展示責任者であったスタンレー博士の言うように、日本軍の錆びたヘルメットや水筒、軍刀や日章旗は、戦争の惨状を伝えるものであるかもしれない¹⁹。しかし、署名のある日章旗や、名札のついたままの日本兵の軍服など、本来は遺族の元に返されるものであろうと思うと、勝者が持ち帰った「戦利品」という印象は否めない。

第四に、自己犠牲を強いたオーストラリア人の記録であるために、共に戦った米軍や英軍の存在は薄い。ニューギニア戦で連合軍を指揮したマッカーサー司令官に関わるものは、対日戦の解説と一緒に展示されている写真と愛用のパイプぐらいしかない。

第五に、「名誉の戦死者リスト」にも階級が記されていないように、展示においても士官や司令官が特別扱いをされることはなく、第二次大戦の展示には司令官の写真や肖像画はない。ただし、ベトナム戦争の退役軍人であるゴウワー (Steve Gower) 現館長が就任して以降、南西太平洋方面陸軍司令官であったブレイミー (Thomas Blaimy) 将軍の肖像画が準備されているそうである²⁰。他方、女性の扱いは大きい。肖像画がほとんど展示されていない太平洋戦争のセクションでは、バンカ島事件²¹で生き残ったブルウィンケル (Vivian Bullwinkel) 看護婦の肖像画

は目を引く。一方、ココダ戦を含む東部ニューギニア戦で豪軍を支援したパプアの現地人や、オーストラリア先住民の展示はわずかである。

第二次大戦の展示は、対日戦の勝利と戦争裁判で締めくくられる。広島原爆投下の惨状を示す映像や溶けたガラスが、対日戦終了の喜びの声や音楽と、日本軍降伏時に差し出された日本刀が同じブースに納まっている。そして、第二次大戦の展示室の出口の壁には、以下の言葉が印字されている。

5000万の人々の死 — オーストラリア人 40,000人
戦争が引き起こした苦痛は計り知れない
連合軍の勝利は想像を絶する悪を倒した
我々が記憶する限り、彼らの死は無駄ではない

第二次大戦は「悪」を倒した正当な戦争だった。その戦争に献身した豪兵の死を記憶することが、オーストラリア国民としての使命なのだと、豪戦争記念館は来館者に訴えている。

5. むすびにかえて

豪戦争記念館の展示には、日本軍と現在の日本人を結びつけるものはない。それでも、豪戦争記念館のボランティア・ガイドによると²²、「現在の日本人はとても親しみやすいのに、なぜ、この時代はこのような残虐な行為ができたのか」としばしば来館者に聞かれるという。

昨今のオーストラリアでの太平洋戦争関連の出版物は、日本の脅威と豪防衛のために自己犠牲を強いた豪兵の貢献を強調し、理不尽で残虐な日本軍を再確認するものが多い。特に、日本軍捕虜収容所の記憶は、時が経つとともに第二次大戦中の多くの事件が忘れ去られた中で、1980年代に「再発見」されたものである。その思い出された「記憶」の中では、個々の体験の多様性は看過され、他の捕虜収容所との類似性が指摘されることもなく、日本軍に独特な状況として語られているとネルソンは指摘する (Nelson 2005a)。

豪戦争記念館は、日本の戦争責任を断罪する意図はない。しかし、その展示が、オーストラリア人が持つ一般的なイメージに対して挑戦的な啓蒙活動をするものではないとすれば、来館者に戦闘での豪兵の自己犠牲や日本軍捕虜収容所での受難の疑似体験を促し、既に持つステレオタイプ化された日本軍の残虐なイメージを固定化させる可能性を持つ。

また、太平洋戦争の体験者と日本人との距離は未だに遠い (Inglis 2001: 483; Adachi and McKay 2006)。日本政府は「和解」を促進するために、全豪 RSL の会長や州の会長を日本に招待した。会員の批判を受けながらも全豪 RSL の会長は訪日を承諾し、2001年に横浜の連合軍の墓地や直江津捕虜収容所跡を訪れた。最後まで辞退していたニューサウスウェールズ州 RSL の会長も、2005年に組織された3回目のプログラムで訪日を果たしている。それでも、日本との「和解」の動きに対しては、会員からの批判は根強い²³。1990年代半ばに、キャンベラのバリー・グリフィン湖畔に建設された公園に「キャンベラ・奈良平和公園」と命名しようとした際に、地元 RSL が強く反発して物議を醸し、ハワード首相の介入によって「キャンベラ・奈良公園」と名付けることで決着した事件があった。2005年、ACT の RSL 会長がこの公園名に「平和」を入れることに問題はないと発言したが、結局会員の反対が強く「キャンベラ・奈良平和公園」への改名には至らなかったのである²⁴。

とはいえ、戦後日豪両国は西側諸国の一員として友好的な関係を築いてきたために、オース

トラリアにおいては、日本人の戦後責任を追求する声は強くない。日中関係や日韓関係に見られるように、過去の戦争の記憶が日豪間での政治的な争点になるとは考えられない。例えば、イラクにおける豪軍と自衛隊の協力関係は、好意的に捉えられている場合が多い。2005年の対日終戦記念日の記念式典に上田大使夫妻が招待されて、豪戦争記念館で献花を行った。駐豪日本大使がこうした記念式典に招待されたのは初めてのことである。

さらに、太平洋戦争の体験者が高齢化する中で、積極的に日本との交流を進めようとする帰還兵も多数ある。日本軍捕虜収容所の体験者であっても、現在の日本人に戦争責任を問う声はほとんどない。とすれば、日豪間においては、今後「忘れ去られた」個々の多様な戦争体験を掘り起こし、記録し、ステレオタイプ化された国家の戦争体験と敵の姿を問い直すことが可能で、かつ重要な作業であるといえよう。

¹ 第一次大戦中の1915年4月25日明朝、英国、フランス、オーストラリア、ニュージーランド軍は、トルコのダーダネルス海峡の入り口のガリポリ半島に上陸した。アンザック (ANZAC) とは「オーストラリア・ニュージーランド陸軍部隊 (Austrian and New Zealand Army Corps)」の略称である。豪帝国軍 (Australian Imperial Force: 第一次、第二次大戦ともに、志願兵から編成された海外派兵部隊をこう呼んできた。) は5万人近くをガリポリに派兵し、トルコ軍と対峙して膠着状態が続いたまま、同年12月に撤退するまでに2万6000人もの死傷者を出した。

² イギリスを始め、ヨーロッパでは第一次大戦の停戦記念日である11月11日の Remembrance Day が最も重視されているのは異なり、オーストラリアでは、アンザック・デイが第一次大戦およびその他の戦争の追悼式典を行う日となっている。ガリポリ上陸作戦での犠牲の大きさをゆえに、翌年の1916年4月25日にはヨーロッパ戦線で任務についていたアンザック軍は追悼式を行い、2000人のアンザック兵がロンドンで行進を行っている。ほぼ同時に国内でも追悼式が行われるようになった。1927年シドニーで、国内最初に公式に夜明けの追悼式典が行われた。

³ 1916年に帰還兵連盟 (The Returned Sailors and Soldiers Imperial League of Australia) として発足、各州に組織を拡大し、1965年には 'Returned Services League of Australia (RSL)' に名称が変更された。1990年に現在の「退役軍人連盟 (Returned and Services League of Australia Limited)」となった。

⁴ 東部ニューギニアのポートモレズビー防衛戦の中に位置づけられる。1942年7月21-22日に、日本軍はゴナに上陸し、オーエン・スタンレー山脈を越えてポートモレズビーの攻略を試みた。日豪軍が最初に交戦したのは7月23日、豪軍のパトロール隊と遭遇した時であった。その後、8月19日にはブナに南海支隊が上陸してココダ山道を進軍、8月26日には豪軍イスラバ守備隊と交戦した。9月半ばには、日本軍はポートモレズビー近くのイオリバイオに到着したが、撤退命令を受けて撤退、豪軍が追撃した。この間の戦闘で、日本軍は約1000人、豪軍は600人の死者を出した。

⁵ 大変充実したウェブサイトをもつ (<http://www.awm.gov.au/>)。以下の豪戦争記念館に関する記述は、当サイトおよび M. McKernan による *Here is Their Spirit* (McKernan 1991) に依る。

⁶ 1879年にニューサウスウェールズで生まれるが英国で教育を受ける。オーストラリアに帰国後、ジャーナリストとして活躍し、1914年に従軍記者として任命される。1915年4月にはガリポリ上陸作戦を体験し、その後フランス、ベルギーの西部戦線で豪軍とともに行動した。豪戦争記念館の創設の必要性を早くから訴え、1914-18年には、12巻におよぶ豪戦史の編纂を任命された。その後もアンザック軍に関する多くの著作を記し、アンザック神話の形成に大きく寄与した人物とされる (津田、2006)。

⁷ 1894年生まれで、1915年4月25日のガリポリ上陸作戦を陸軍大尉として指揮した。1917年、ロンドンに創設された豪戦史記録部に着任し、以降豪戦争記念館の創設と運営に生涯を捧げた。1920年に豪戦争記念館の館長として就任、死亡する1952年まで館長を勤めた。

⁸ 1970年代半ばの豪戦争記念館の年次報告書 (*Annual Report*) を見ると、収集品の痛みが激しく、修復不可能という記述がしばしば見受けられる。

⁹ スタンレー博士とのインタビュー (2006年3月2日、キャンベラ)。

¹⁰ 1993年11月11日、Remembrance Day、豪戦争記念館「追憶の堂」でのスピーチ。(豪戦争記念館ウェブサイト：<http://www.awm.gov.au/commemoration/keating.htm>、2006年11月26日アクセス)

¹¹ どちらも英連邦軍で伝統的に用いられ、現在では永遠の別れの時に演奏される追悼の曲である。

¹² この4つの語句は、豪兵の特質を讃える理念として定着しつつある。ココダ戦60周年の2002年8月14日、ハワード首相は退役軍人とともにココダ山道を訪れ、日本軍と最初に交戦したイスラパでの追悼式典に参加し、豪軍を追悼する石碑の除幕式を行った。2枚の御影石で作られた追悼碑の両面には、「勇氣」「忍耐」「友情」「献身」の4つの言葉が1つずつ刻まれている。

¹³ スタンレー博士とのインタビュー（2006年3月2日、キャンベラ）。

¹⁴ 現在のジェフリー連邦総督（Major General Michael Jeffery）は、1937年生まれで、キャンベラの国立士官学校を卒業後、陸軍士官として、マラヤ、ボルネオ、パプア・ニューギニア、ベトナムでの従軍経験を持つ。退役後は、西オーストラリア州総督（1993-2000）を経て、2003年より現職。

¹⁵ *Australian War Memorial, Annual Report 1977-78*, p.4.

¹⁶ スタンレー博士とのインタビュー（2006年3月2日、キャンベラ）。

¹⁷ スタンレー博士とのインタビュー（2006年3月3日、キャンベラ）。

¹⁸ 同上。

¹⁹ 同上。

²⁰ 同上。

²¹ 1942年2月、シンガポールから撤退する豪軍従軍看護婦を乗せた船が、スマトラ島南東部のバンカ島近くで日本軍の爆撃を受け沈没した。バンカ島には22名のオーストラリア従軍看護婦と30数名の民間人が辿り着いたが、通報を受けて到着した日本兵に殺され、ブルウィンケル看護婦のみが奇跡的に生き残った事件である。戦争記念館には、その時にブルウィンケル看護婦が着用していた銃痕のある制服も展示されている。

²² ボランティア・ガイドのリグリー（Norma Wrigly）、ホーン（Rosanna Horn）、ヴァーチャー（Barrie Virtue）の3氏とのインタビューを行った（2006年3月2日、キャンベラ）。

ボランティア・ガイドは1976年に導入された制度で、無償で館内のガイドを担当する。1日に6回、約1時間のツアーである。リグリー氏は導入当初からのガイドである。どの展示を取り上げて説明するかは、個々のガイドに任せられているが、説明に使用できる言語は英語のみで、説明には個人的な感情は入れないことが規定である。例えば、ホーン氏はポーランドからオーストラリアに移住をした人であるが、ガイドの時には、ポーランド語もドイツ語も使わない。インタビューをした3人の間でも、どの展示を取り上げるかには、かなり違いが見られた。例えば、ホーン氏は、絵画（豪戦争記念館は多数の絵画を展示している）を中心にツアーを構成している。一方、ヴァーチャー氏は、「名誉の戦死者リスト」の前で紹介した人物を、展示のジオラマや展示物を通してもう一度紹介するということである。また、ガイドツアーの参加者の構成や反応をみながら、説明する内容を選択するという。ガイド内容に関しては、豪戦争記念館の専任の研究者と学芸員により、定期的にチェックがある。また、授業の一環としての学校の社会見学に対しては、特別の申し込みを受けて、館員が担当する。

²³ ACTRSL 会長 プロディー（Gary Brodie）氏とのインタビュー（2006年3月7日、キャンベラ）。

²⁴ *The Canberra Times*, July 2 2005.

文献

- 藤原帰一 (2001). 『戦争を記憶するー広島・ホロコーストと現在』 講談社新書.
- 鎌田真弓 (2004). 「日豪関係の歪みーオーストラリアの太平洋戦争」 関根政美・山本信人編『海域アジア』 (現代東アジアと日本 第4巻)、pp.281-300.
- 津田博司 (2006). 「オーストラリアにおけるアンザック神話の形成ー C.E.W. ビーン (1879-1968) とイギリス帝国」『西洋史学』第220号、pp.22-42.
- Adachi, Ryoko and Andrew McKay (2005). *Shadows of War*, Briar Hill: Indra Publishing.
- Australian War Memorial (2005). *Gallery Master Plan*.
_____ (1997). *1942 - 45 Gallery Design Brief*.
_____. *Annual Report*, Australian Government Publishing Service.
- Gelder, Ken and Jacobs, Jane M. (1998) *Uncanny Australia: Sacredness and Identity in a Postcolonial Nation*, Carlton South: Melbourne University Press.
- Inglis, K. S. (2001). *Sacred Places: War Memorials in the Australian Landscape*, Carlton South: Melbourne University Press.
- McKernan, Michael (1991). *Here is Their Spirit: A History of the Australian War Memorial 1917 - 1990*, St Lucia: University of Queensland Press.
- Nelson, Hank (2003). 'Kokoda: The Track from History to Politics', *Journal of Pacific History*, Vol.37, No.1, pp.109-127.
- _____ (2005a). 'Beyond Slogans: Assessing the experiences and the history of the Australian prisoners of war of the Japanese', paper presented at 'The Japanese Occupation: Sixty Years after the end of the Asia-Pacific War Conference'. The Singapore History Museum, 5-6 September 2005.
- _____ (2005b). 'The Enemy at the Door: Australia and New Guinea in World War II'. unpublished seminar paper.
- Stanley, Peter (2005). 'Threat Made Manifest'. *Griffith Review*, Spring.
http://www3.griffith.edu.au/01/griffithreview/past_editions.php?id=201

謝辞

本研究は、平成16-17年度りそなアジア・オセアニア財団「調査研究・国際交流活動助成」を受けて行っている共同研究「戦争、市民、ネイションーオーストラリア社会における太平洋戦争の体験と公的記憶の位相」の研究成果の一部である。本稿は、当助成により、平成18年2月27日から3月10日にかけてキャンベラとシドニーで行った調査をもとにしている。ここに記して感謝の意を表する。